

# インドの政治家・ジャワハルラル・ネルーの 日本観

李 景 珉

## はじめに

ネルーは、1940-50年代、世界でもっとも注目を浴びた政治家の1人であった。約200年に及ぶ長年のイギリスの支配から独立した祖国インドの初代首相として、国内外の諸問題に、特にアジア・アフリカ諸国との連帯に、米ソ冷戦時代の国際政治においても、彼は先駆的な役割をはたした人物であった。

彼は、インドの富裕な家庭に生まれ、恵まれた環境のなかで最高教育を受けた。イギリスによる植民地統治下にあつて、極めて限られた自由のなかでの暮らしであったが、彼は国内外を存分に歩き廻って見聞を広めた。そして、インドの問題をグローバルな視野に立って考えて、その自治・独立を追求していった。

彼は、果敢に政治・社会運動を展開していきながらも、絶えず勉学を続けていたのである。ネルーは政治家というより、インドの知性とも言われた所以である。

ネルーは、植民地当局に頻繁に逮捕され、その都度、インドのどこかの刑務所の常連でもあった。そうした押しつけられた「休息」のなかで、彼は思索にふけ、また世界の歴史を探究していた。40代で世界の文明、中世、ルネサンス、産業革命、民主主義、世界大戦などについての一見識をもっていたのである。彼の著書『父が子に語る世界歴史』はその一つであり、本稿では、そのなかで日本をどのように捉えていたのかを考えてみたい。

## (1) 人物・ネルー (Jawaharlal Nehru)

ネルーは1889年11月14日、インド北部のアラーハーバード (Allahabad) (今の

ウツタル・プラデシュ州の州都)に生まれた。一家は、カシミール出身の富裕なバラモン階級で、父は弁護士で生活は豊かであった。父は、イギリス人によって設立された「穏健な団体」としての政治組織、「国民会議派」The Indian National Congress (Party)の指導者として活動したこともあり、独立進取の気風に富む人物であった。しかし、インドの独立運動に積極的に関わるより、つとめて職務に、仕事に精励した。1931年に病気で死亡している。兄弟は妹が2人いた。

ネルーにとって父親の存在は大きく、彼の人格形成に強い影響を与えた。若いネルーは、イギリスの植民地支配下のインドで、イギリス人やヨーロッパ人の高慢で侮蔑的な態度を目の当たりにしては憤慨した。彼は将来、インドの独立のために戦うことを早くも考えるようになった。

彼の父は、息子がインドの独立運動に参加することに憂慮し、反対もした。しかし、ネルーは、父親の死後も、自分の初志を貫いて、インドの自治、独立を追求する運動に没頭したことになる。

1905年5月、15歳の時、ネルーは留学のために父に連れられてイギリスに行く途中、帝政ロシアがアジアの小国日本に敗れたことを知って感激したという。世界最強の陸軍やバルチック艦隊をもっていたロシアに日本が勝利したのは、信じられないことであった。日露戦争は彼に強い影響を及ぼした一つの出来事であった。

ネルーは、英国の伝統的な全寮制パブリックスクールであるハーロー校(Harrow School)に入学した。そして2年後、同校を卒業してケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジに進学して、自然科学(化学、地質学、植物学)を専攻した。1910年に同大学を卒業し、ロンドンでさらに勉強して1912年に弁護士の資格を取得して帰郷した。

ネルーは、アラールハーバードの高等裁判所に勤めた。しかし7年間のイギリス生活からインドに戻ったネルーは仕事になじめず、インドにいても異邦人のような気がしてならなかった。自分自身のアイデンティティー探しに、さらに弁護士の仕事を継続するか、それとも民族運動、自治を求める闘争に参加するかで悩んでいた。

帰国してから4年後、ネルーは同じバラモンで富裕な商人の娘カマラーと結婚する。そして彼より20歳年長のガンディーに出会い、政治運動に参加することになる。ガンディーは、その前年、1915年に長いアフリカ生活からインドに戻った直後であった。ネルーはガンディーの印象を次のように述べている。

「彼はまさに一陣の涼風のように、われわれに大きく胸をはらせ、深々と呼吸をさせた。彼は闇にさし込む一条の光明のようであり、われわれの目からうろこを取り去った。彼はまた旋風のように、多くのものを、よりわけ民衆のこころのいっさいの動きを一変させた」と。<sup>(1)</sup>

ネルーはガンディーの感化を受け、これまでの「安易を求めていた蕩児の段階から脱却して、活動の中に満足を発見し始めたのである」。<sup>(2)</sup> そしてガンディーの導くままに身をまかせるようになった。ネルーは、父の許しを得て、弁護士をやめて「反英非暴力・非服従・非協力運動」に参加して、以降、インドの自治・独立運動に専念するようになった。

ネルーはガンディー（Mohandas Karamchand Gandhi 1869-1948年）を心から尊敬したが、両者は、社会的・政治的な考えの違いから、しばしば衝突することもあった。

ガンディーは、宗教の国インド、貧困な農民の国インドを足場にしていた。彼の靈感は、ことごとくこのインドから求められた。<sup>(3)</sup> 無論、彼は、インドの自治、独立を勝ち取ることに力点をおいていた。しかし、その闘争は、平和的な手段、非協力的な手段を行使するものであった。彼の言う非暴力的な手段は、他人のことを平和的に考え、他人に友愛を持って対するということであった。愛と自己犠牲によって、相手の良心に訴え、相手の鋒先をにぶらせる方法であり、それは、血なまぐさい武器の使用を伴う運動よりはるかに積極的で有効な武器でもあるとガンディーは考えていた。

しかし、それを他者が理解することはそうたやすいことではないのである。性急なネルーは、愛と非暴力を現実の場で実践するガンディーの形而上学的な言説には、ついて行けないことがよくあった。ネルーは靈感を求めてインドの伝統を振り返るようなことはしなかった。ネルーは、インドの政治的独立をすべてに優先させるべきとの考えが強く、積極的な運動、闘争が欠かせないと主張した。

ネルーはガンディーとともに国民会議派に入り運動を展開した。国民会議派は、1885年12月ボンベイで開催されたインド国民会議がその起源である。その参加者は、イギリス支配に協調的な地主、知識人、商人などであった。設立当初はイギリス当局の老獪な政策や、国家機関へのインド人登用を目的とするイギリス政庁に従って動く「組織」であったが、次第に時代とともにインドの自治・独立を主張する人々が多く参加するようになった。国民会議派の指導者ガ

ンディーは、完全な自治を要求して、非協力・不服運動を展開し、運動は民衆のあいだに深く根をおろした。ガンディーは、その保守派グループに属していたが、ネルーは、国民会議派左派の中心的な指導者となり、1928年に国民会議派書記長、翌1929年初めて国民会議派議長に選出され、同年全インド労働組合会議議長をも兼任した。<sup>(4)</sup>彼はロシア革命の影響もあって、いまやヨーロッパ帝国主義者の支配下にある民族の独立には、「社会主義」の考えが大勢と受け取っていたし、インドでも、それは当然の思想、勢力になるものとの見通しを堅く持っていた。ネルーは、1929年の国民会議派大会で将来のインドの採るべき道として「社会主義型社会」の構想を語っている。ネルーは、1936年と1946年にも国民会議派議長に選出された。

ガンディーは、ネルーの民族への誠実、献身をいささかも疑っていなかったが、あまり先へ先へと行く社会主義グループの「闘争」には苦々しく思っていた。

ネルーは、ガンディーが指導した非協力運動に積極的に参加するようになってから、1945年まで9回もイギリス当局に検挙され、通算9年間の獄中生活を送った。<sup>(5)</sup>ネルーの表現によれば、こうした「禁錮の刑に服していた」とき、彼は勉強に専念し世界歴史を記述するのにも当てたのだった。獄中でネルーは『父が子に語る世界歴史』(1934年)や『自伝』(1936年)、『インドの発見』(1946年)といった著書を完成させている。

1925年には妻カマラーの病気療養のために、ヨーロッパにしばらく旅行している。1927年には国民会議派の代表としてベルギーのブリュッセルで開かれた「非抑圧民族大会」に出席して、アジアの革命家たちとも交流している。学生時代以来のヨーロッパ旅行であり、その間の世界の情勢変化を観察したことになる。ソ連にも立ち寄って、ロシア革命10周年の変化に魅了されたようである。

ネルーは、当局に逮捕されてないとき、1935年、36年、38年にもヨーロッパを訪れている。内戦中のスペインも訪問している。国民会議派議長を務めながら、著作活動も活発に行った。妻カマラーも独立運動に参加していたが、彼女は1936年に結核で死亡した。妻との間に一人娘に後にインドの首相となるインディラ・ガンディーがいる。

1947年8月、インド独立後、ネルーは初代首相となり、国家建設に尽力した。ネルーは、世界平和に直接関連する問題について積極的に発言した。インドの外交は、平和外交の追求であった。ネルーは、米ソ間の争いに巻き込まれない姿勢で、非同盟政策を掲げたのであった。

ネルーは、中国、すなわち1949年10月に誕生した北京政府の存在は、明々白々の現実であるにもかかわらず、この現実を覆うアメリカのアジア政策はあまりにも不自然であると捉えていた。1954年6月、中国の周恩来首相と会談したネルーは、アジアの平和と安定に関する外交原則を共同で声明した。中国との〈チベットに関する協定〉のなかの平和五原則、すなわち領土・主権の相互尊重、相互不可侵、相互内政不干渉、平等互惠、平和共存を、一般の国際関係における原則として合意、確認している。

ネルーは翌年、この原則を基調とするバンドンでのアジア・アフリカの29カ国首脳らの会議で主導的な立場に立ち、非同盟諸国の団結強化の上で重要な役割を果たした。まさにネルーは、「第三世界」の中心的人物として注目されたのである。

## (2) 『父が子に語る世界歴史』のなかの日本

ネルーは、イギリスによるインド支配に対する闘争で、何度も植民地当局に逮捕され、禁錮の刑に服している。彼は、1930-33年の間、インドの数カ所の刑務所内で、幼い1人娘にあてた手紙の形で「世界の歴史」を書いたのである。その中には、日本について述べた部分もあるが、その一部を抜粋するとおおよそ以下の通りである。

…中国のすぐ近所の国あり、また多くの点から中国文明の子供たちというべき、朝鮮と日本をみておくことにする。彼らはアジアの東の涯（はて）にあって、ここを行きすぎると、あのひろい太平洋だ。…中国から、また中国を通じて、かれらはその宗教と、芸術と、文明とを手に入れた。日本と朝鮮の両国は、中国に莫大な借りものをしたわけだ。あるものはインドからも受け入れたが、インドから来たものは、すべて中国の手をつうじて伝えられ、中国の精神によっていどられたものであった。

…気の毒な小国朝鮮は、こんにちではほとんど忘れられている。日本に併呑され、その帝国の一部にされているからだ。しかし朝鮮は、いまでも自由を夢み、独立をもとめて戦っている。日本のほうは、いましきりに活躍して、新聞はその中国攻撃の記事で埋まっている。こうして書いているあいだにも、満州では、戦争らしいものが進行している。

…忘れてはならないことは、彼らの長期にわたる孤立だ。じっさい日本は、孤立と侵略からの自由（侵略をまぬがれること）にかけては、おどろくべき記録をもつ。その歴史をつうじて、めったに外部からの侵略がくわだてられたことはなかったし、たまたまあっても、いずれも成功せずにおわった。日本を悩ませた紛争といえば、最近まで、すべて自国内部の紛争であった。

…そしてそれから、突然日本は門戸を開け放って、ヨーロッパから学べるものは、なにもかも、しゃむに学びとった。しかもその吸収欲の旺盛なことは、わずかに、二世代を経たのちには、外面的には、どのヨーロッパの国にもおとらないようになり、かれらのあらゆる悪い習慣まで、そのまま模倣しきったほどであった！すべてこれらは、最近700年内外のできごとだった。

…日本の古来の宗教は神道だった。これは「神がみの道」という意味をあらわす中国語だが、自然崇拜と祖先崇拜の混合物であった。それは、後生（死後の生活）だとか、奇跡だとか、人生問題とかは、あまり問題にしなかった。それは、武事を尊ぶ人種の宗教であった。

…ところが日本人は、むかしからいまにいたるまで、戦闘的な民族だ。軍人のおもな徳目は目上の人と同輩に対する忠節だが、これがまた日本人の美德であり、かれらの強さは多くこれに由来する。神道は、このような徳を教える—「神がみをうやまい、その子々孫々に対し忠節をつくし奉るべし」—このようにして、神道は今日の日本にまで伝わり、いまだに仏教と共に存続している。

けれども、これが徳といえるだろうか？同志や大義への忠誠心は、たしかに美德ではあろう。しかし神道にしても、他の宗教にしても、往々にして、われわれの忠誠心を利用して、われわれを上から支配する人びとの集団の御用に供しようとする。

（第一巻、216-223頁）

…1641年以来、200年以上も、日本の人民は、世界の他の部分から切りはなされたままで暮らしてきたのだ。

…しかし、変化というものは避けがたいものだ。外部との接触は止められたけれども、日本それ自体の内部で、変化が起こっていた。

…他の諸国と同様、封建制度は経済的な崩壊にゆきついた。不平不満は増大し、政治の頂点にあった将軍は、その標的とされるようになった。神道崇拜の勢力が拡大した結果、太陽に直接つながる子孫と考えられていた天皇に、人心

があつめられることになった。このようにして民族主義の精神は、高まり行く不満の中から成長した。そしてこの精神は、経済的分解のなかにその基礎を置きつつ、不可避の変化をみちびき、日本を世界にむかって開放しなければならなくなった。

…1853年に、アメリカの一艦隊が、アメリカ大統領の書簡をたずさえて日本にやってきた。これは、日本がはじめて見る蒸気船であった。一年後に、将軍は二つの港を開放することに同意した。これにならって、すぐにイギリス人、ロシア人、オランダ人もやってきて、おなじような条約を、将軍とのあいだに結んだ。こうして日本は、213年を経て、再び世界にむかって開かれた。

…新しい天皇は、いまや、しかるべき地位についた。

…この時期は明治（啓蒙された統治という意味）時代として知られている。日本がばく進をはじめ、西洋諸国を模倣して、さまざまな観点からそれらの競争者となったのは、かれの治世のことだ。この一代のうちにもたらされた、はかり知れない変化はまさに驚異であり、歴史のうえでも、くらべるものがないほどだ。日本は大工業国となり、西洋諸国の例にならって、帝国主義的略奪国家となった。日本は、進歩のあらゆる外面的特徴を備えており、工業については、その教師たちを凌駕させている。人口は急激に増加し、商船は世界中を航行するようになった。日本の声は、いまや国際政治のうえに重要な意味をもつものとして、世界の注意をあつめている。

…日本におけるこの大変革に責任をもつ人々は、貴族のなかの先覚者の一団であった。

…工場は続々と建てられ、近代的な陸海軍が組織された。専門家が外国から招聘されるとともに、日本からもヨーロッパや、アメリカに学生が派遣された。彼らは、インドが過去にしたように顧問弁護士になるためではなく、科学者や、技術者になるために留学したのだ。

…日本は産業の方式においてばかりでなく、帝国主義的な攻撃のしかたについても、ヨーロッパのあとを追った。日本人はヨーロッパ列強の忠実な弟子以上のものであり、しばしばその上を行きさえたのだ！日本の真の困難は新工業文化と、旧封建主義とのあいだの不協和にあった。両者を同時に実行しようところろみた日本は、経済的な均衡に達することができなかった。

…その新産業もまた、日本を、原料と、他国の市場の獲得をもとめずにはいられない境遇に追い込んだ。それは産業革命がイギリスに、また後には、ほかの

ヨーロッパ列強に、大概侵略と、征服を強調したのとおなじことだ。

(第4巻、163-172頁)

ネルーは、日本を極めて客観的に捉えている。刑務所の中の限られたスペースの中で、世界の歴史を勉強しながら、日本に関して、これだけの内容の書物をまとめたことには、嘆美する。

神道については、「これを徳といえるだろうか？」同志や大義への忠誠心はたしかに美德ではあろうが、往々にして、支配者の御用に利用されるとネルーは指摘している。

ネルーは、19世紀後半における中国と日本とを比較・対照している。日本は急速に西洋化したのが、中国はなぜそれができなかったのか。島国の日本は、スケールが小さく新たな情勢に対応するのにコンパクトに道を突進することが可能であったと指摘している。しかし、中国の場合、国土の広大さ、膨大な人口、それに偉大な「文明」さえ、容易に取り替えることができないことを上げている。それは、インドに対しても言えることだと述べている。

1894-95年の日清戦争は、日本がすでに陸海軍を新式で組織・訓練させて用意万端な状態で臨んだので、旧式の軍隊のままの中国に勝利したことは「朝飯前の仕事」であった。中国に勝った日本は、極東における最大の強国の地位を得たのである。

その後、ロシアが、満州、朝鮮への勢力を拡張したことは日本を強く刺激した。日本は無言のうちに、しかし営々として戦争の準備に取りかかった。日清戦争10年後の日露戦争に日本が勝利したのを、ネルーは少年時代に、「ヨーロッパの大国ロシアが日本に敗れた」と感動しており、それを娘によく話したと書いている。ネルーに限らず、アジアの多くの少年、少女も「日本兵の勇氣に」感心したのだった。西洋ヨーロッパ帝国の侵略を受けていたアジアの国々にとっては、それは大きな希望と勇気を与えてくれて、「刺激」ともなったことだろう。

しかし、日露戦争における日本の勝利は、その後の日本を朝鮮の植民地支配に、さらには中国侵略へと向かわせた。開戦の責任が重いのは、日本かロシアか。日本が自衛のためにやむをえず開戦したという理屈は果たして成り立つのだろうか。戦争の主戦場となったのは朝鮮半島と中国東北部だったにもかかわらず、中国と朝鮮の民衆の視点はほとんど抜け落ちていたのではないだろうか。

ネルーは、「日露戦争のすぐ後の結果は、一握りの侵略的帝国主義グループに

もう一国を加えたというに過ぎなかった」と述べている。(第4巻、181頁) その苦い結果を最初になめたのは、朝鮮の民衆であった。

## おわりに

ネルーは、1957年10月日本を訪問している。子供のときから日本訪問を夢見ていたが、それが実現したことになる。日本の新聞は競って紙面を割いてネルー・インド首相の訪日を報じた。人々は、東西に分かれて対立する米ソ両陣営のいずれにも与することなく、世界平和への歩みを推し進める指導者・ネルーに大きな期待を寄せたのであった。ネルーは、日本の一般大衆の賓客として、熱狂的に迎えられた。

彼は、日本に来て日本人の心にふれてみたいという希望を持っていた。「私は英国で教育を受け、半生を反植民地主義の革命運動に送った。私の思想は西欧の伝統に立っており、インドの現実との矛盾に悩むことが多い」という告白もしている。<sup>(6)</sup> 訪日を終えてインドに帰国したネルーは、日本訪問について、「書物で読んだり、人から聞いたりした日本よりも、訪日して知った日本の方がもっとよかった」とも語っている。

ネルーは、その後1964年5月27日(満74歳)亡くなった。

### (註)

- (1) 森本達雄『インド独立史』中公新書、1972年、105-106頁。
- (2) 蠟山芳郎「ガンジーとネルー」38頁、蠟山芳郎『世界の名著63 ガンジーとネルー』中央公論社、1967年、所収。
- (3) 同上、32-33頁。
- (4) 森本達雄、前掲書、189頁。
- (5) 同上、134頁。
- (6) 「ネルー訪日の成果」『世界』、1957年12月。

### 参考文献

- J・ネルー(大山 聰訳)『父が子に語る世界歴史』全8巻、みすず書房、2002年。  
(Jawaharlal Nehru, Glimpses of World History, Being Further Letters to His Daughter Written in Prison, and Containing a Rambling Account of History for Young People, Lindsay Drummond Limited, London 1934)
- 蠟山芳郎『世界の名著63 ガンジー ネルー』中央公論社、1967年。
- 森本達雄『インド独立史』中公新書、1972年。
- 賀来弓月『インド現代史』中公新書、1998年。
- M・ブリッチャー『インド現代史—ネルー、その政治的生涯』(張明雄訳)世界思想社、1968年。  
(Michael Brecher, Nehru: A Political Biography, Oxford University Press London, 1961)